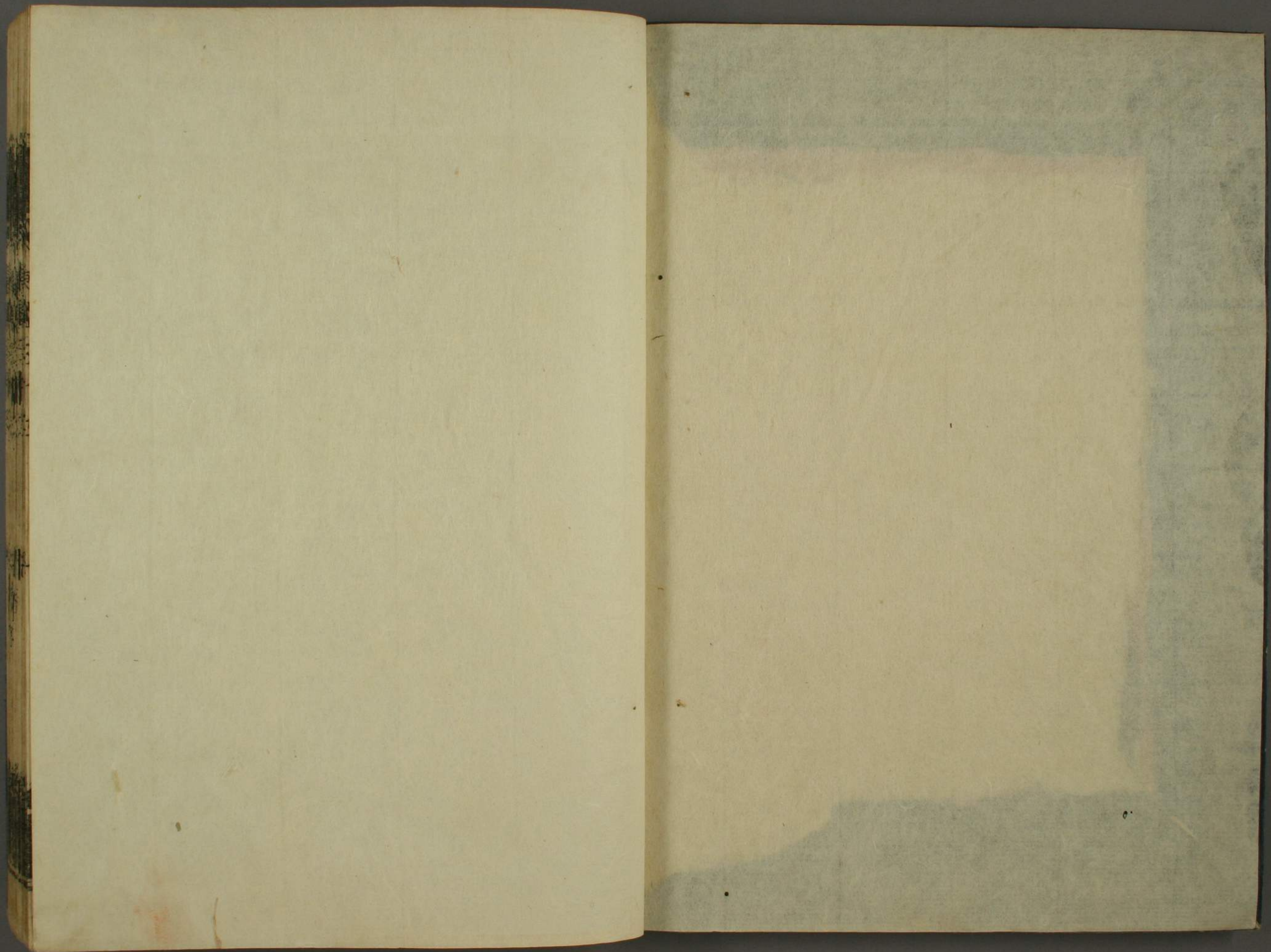


東鑑

伊  
402  
17

伊  
402  
25-17





同會

新刊

吾妻鏡卷第三十二

嘉禎四年 戊戌十一月廿三日 為曆元



正月小

戊申

雨降。今日，堯飯。御劍宮内少

輔日 泰長

若狹守泰村

御行騰沓大和守祐時等

御調度 持參之

一御馬

相摸式部大夫

本間式部丞

二御馬

相摸六郎

橘右馬允

三御馬

上総介太郎

同次郎

四御馬

本間次郎左衛門尉

同四郎

五御馬

越後太郎

吉良次郎

伊 402 卷 17



二日 巳酉 堀飯左京北御劍駿河前司義村  
御調度 玄番頭基經 御行騰 肥後守為佐

一御馬 北條左近大夫將監信濃三郎左衛門尉

二御馬 駿河五郎左衛門尉 同八郎左衛門尉

三御馬 上野左衛門尉 同彌四郎

四御馬 近江四郎左衛門尉 佐々木六郎

五御馬 北條五郎 南條七郎左衛門尉

三日 庚戌 堀飯遠江守御劍右馬權頭政村

御調度 速江式部大夫光時御行騰壹岐守光村

等持參之

一御馬 遠江三郎 小井互左衛門尉

二御馬 陸奥七郎 廣河五郎

三御馬 信濃三郎左衛門尉 隱岐四郎左衛門尉

四御馬 小野寺次郎左衛門尉 同四郎左衛門尉

五御馬 豐田太郎兵衛尉 同次郎兵衛尉

四日 辛亥 將軍家二所御精進始

九日 丙辰 二所御進發左京地供奉給御經供

養導師大納言律師隆辨云

十日 丁巳 丑刻三浦駿河前司玄番頭若狹守

家村等依失火災

十五日 壬戌 霽 午刻將軍家自二所還御

十八日 乙丑 天晴 匠作左京地被候小侍所主

計頭師負毛利藏入大夫入道西阿玄番頭基經隱

岐入道行西加賀前司康俊等依召參進將軍家御

上洛事有評議為康俊奉行御路次間條々事悉被召付奉行人等諸人不可漏供奉於信濃式部大夫入道行然者可候御留主云亦為師負奉行召陰陽師被問之求廿日御出門廿八日可有御進發而件日八龍也御出門之後者不可憚事歟但同擇宜日可有御進發之由有申行之人可為何様哉可計者暗賢朝臣申云御出門之後強不及擇日次其故者暫有御坐于御出門之所者可准路次逗留之間也然而以吉日御進發又可宜哉來月二日三日可然也此上猶可被問當道歟云早披露此趣重可被尋問當道之由左京地被仰之間基經衆申御前不可有御延引之旨仰切訖云

十九日 丙寅 御所心經會也

廿日 丁卯 御弓始也今年依可為御物忌不可有此儀之由窮冬雖被定故被遂之射事昨夕俄於御前被仰合于如始義村為催促被下日記於陸奥太郎云

射手

一番

小笠原六郎

藤澤四郎

二番

横溝六郎

松置四郎

三番

畠邊左衛門四郎

本間次郎左衛門尉

四番

三浦又太郎左衛門尉

秋葉小三郎

五番

下河邊右衛門尉

山田五郎

午尅將軍家依可有御上洛為御出門入御于秋田  
城介義景其繩家被召御與御立烏帽子御直垂也  
供奉人行糴同奉摸其體云入夜左京地并室家御  
出門于駿河守有時弟

廿八日

乙亥天霽

將軍家御上洛寅尅先晴賢

衆勤御身固今日八龍日也聊有其難歟之由雖有  
願申之族御出門之上者不可及日次沙汰之旨被  
仰無御許容云巳刻進發被用御與護持僧岳崎法

印成源

御驗者公覺僧都隆弁律師賴曉律師

醫道施藥院使良基朝臣陰陽道前大藏權大輔泰  
貞散位晴賢朝臣隨兵以下前後供奉人悉進發之  
處匠作未及御出門立刺有因基會左京地頻被勸  
申之而被祗候人等之未被整放具云仍京兆被獻  
野前行騰等之後酉尅進發給酉尅著御酒勾驛護  
持僧并醫陰兩道之董宿被點御所近邊同雜事送  
夫等者為加賀前司奉行沙汰給云

廿九日

今夕入御藍澤驛

二月大

一日

丁丑天晴

風烈申一點著御車返牧御所

二日

戊寅天晴

大風舉塵蒲原御宿

三日 己卯天霽 手越御宿為左京地御沙汰被  
儲御所又左京地室上洛給今日被立鎌倉

四日 庚辰天霽 鳴田

五日 辛巳晴 懸河御宿為匠作御沙汰仰遠江

國御家人等兼被造御所橫地太郎兵衛尉長直為

奉行云

六日 壬午霽 今晚諸人乘替以下御出以前進

發掩王霸之忠不及狐疑欲競渡天龍河之間浮橋

可破損歟雖加制敢不拘之由奉行人橫地太郎兵

衛尉長直等馳申仍左京兆雞鳴之程於懸河宿到

于河邊著座敷皮雖不令發一言給諸人成禮猶豫

自然令靜謐訖將軍家御通之後乘馬供奉云此河

水俄落供奉人所從等者不能渡浮橋又無乘船沙

汰大半渡河水僅及馬下腹云酉刻入御池田宿

七日 癸未霽 著御橋本驛先之人々點定家々

間陸奧太郎實時主宿于舞澤松原及戌刻京地令

聞彼野宿事給被仰曰實時者小侍別當重職異他

尤可候于御所邊之仁也而依無其所止宿驛上者

予暖座於里家之條有其恐云仍令到于陸奧太郎

野宿之間宮内少輔泰氏駿河前司義村以下人々

多以辭申旅宿條件松原還為諸人之煩早可令入

本所給之由各申之又遠山大和守辭旅店御所招

請陸奧太郎之間京兆憚人々禮令歸本宿給太郎

主施面目宿于和州本所云

八日 甲申 寅剋以後小雨日出屬晴未刻又雨降著御豐河宿及深更風雨甚

九日 乙酉霽 矢作宿入御于足利左馬頭亭依去夜風雨洲俟近兩河浮橋流損云

十日 丙戌晴 萱津御宿亥刻將軍家俄御不例御霍亂歟諸人驚駭醫師時長施醫術之間小選令

御本復仍賜御劍京地令引御馬給云 十一日 丁亥晴 今日御逗留于萱津宿依去夜

御不例餘氣也其後修理兩河浮橋云 十二日 戊子霽 小隈御宿

十三日 己丑天晴 垂井 十四日 庚寅陰 小脇

十五日 辛卯天晴 野路

十六日 壬辰天霽 從五位下行隱岐守藤原朝臣行村法師法名ハ卒年ハ十四日于時在伊勢國益田庄此

間向彼所云今日將軍家御逗留野路驛明白御入洛之間依被定隨兵已下行列也小侍所別當陸奥

太郎實時注供奉人被持叅之匠作京兆於御前令定左右給之後被返奉行人云所被載將軍家御判

於件散狀端也 十七日 癸巳 天顏快晴巳剋御出野路宿先隨

兵以下供奉人自庭上至路次二行座列寄御輿之後騎馬隆親卿以下於關寺邊見物云子刻御入洛

著于六波羅御所世間給



行列

先駿河前司隨兵三騎相並。以家子

一番 大河戸民部大郎 大須賀八郎

佐原大郎兵衛尉

二番 筑井左衛門大郎 同次郎

皆尾太郎

三番 三浦 太郎左衛門尉 同三郎

山田藏人

四番 武小次郎 同三郎

同又次郎兵衛尉

五番 秋葉小三郎 山田六郎

同五郎

六番 多々良小次郎 同次郎兵衛尉

青木兵衛尉

七番 安西大夫 金摩利太郎

丸五郎

八番 丸六郎太郎 三浦佐野太郎

石田太郎

九番 石田三郎 三原太郎

市兵衛次郎

十番 長尾平内左衛門尉 同三郎兵衛尉

平塚兵衛尉

十一番 壹岐前司 駿河四郎左衛門尉

遠藤兵衛尉

康鑑三十二

十二番 駿河五郎左衛門尉 同八郎左衛門尉

三浦次郎

駿河前司

御所隨兵百九十二騎騎馬即從 二人在前 一騎相並各弓袋差 一人步走三人在前

一番 小林小次郎

同小三郎

真下右衛門三郎

二番 猪俣左衛門尉

荏原七郎三郎

河勾野内

三番 二宮左衛門太郎

同三郎兵衛尉

同四郎兵衛尉

四番 池上藤兵衛尉

小串馬允

多胡宮内左衛門太郎

五番 大井三郎

品河小二郎

春日部三郎兵衛尉

六番 高山五郎四郎

江戸八郎太郎

同高澤彌四郎

七番 大胡左衛門次郎

伊佐四郎藏人

大胡彌次郎

八番 都筑左衛門尉

同左近將監

遠藤左衛門尉

九番 山内藤内

同左衛門太郎

西條與一

十番 後藤彌内郎左衛門尉 佐渡五郎左衛門尉

伊勢藤内左衛門尉

十一番 小野寺小次郎左衛門尉同四郎左衛門尉

茵田彌次郎左衛門尉

十二番 紀伊次郎兵衛尉 豊田太郎兵衛尉

同次郎兵衛尉

十三番 片穂六郎左衛門尉 和由左衛門尉

同四郎左衛門尉

十四番 秩父左衛門太郎 倉賀野兵衛尉

那珂左衛門尉

十五番 中澤小次郎兵衛尉 同十郎兵衛尉

河原右衛門尉

十六番 小河左衛門尉 河口八郎太郎

立河兵衛尉

十七番 阿佐美六郎兵衛尉 塩谷民部六郎

福原五郎太郎

十八番 下河邊左衛門尉 新開左衛門尉

大河戸太郎兵衛尉

十九番 中野左衛門尉 俣野彌太郎

海老名四郎

廿番 四方由三郎左衛門尉 塩谷六郎左衛門尉

蛭河四郎左衛門尉

廿一番 栢間左近將監 多賀谷太郎兵衛尉

松屋四郎

廿二番 本庄四郎左衛門尉 西條四郎兵衛尉

泉由兵衛尉

廿三番 中村五郎左衛門尉 同三郎兵衛尉

加治新左衛門尉

廿四番 阿保次郎左衛門尉 加治丹内左衛門尉

同次郎兵衛尉

廿五番 飯富源内 本庄新左衛門尉

那須左衛門太郎

廿六番 進三郎 多賀谷左衛門尉

江帶力左衛門尉

廿七番 本間次郎左衛門尉 佐野三郎左衛門尉

高田武者太郎

廿八番 小河三郎兵衛尉 平左衛門三郎

三村兵衛尉

廿九番 長掃部左衛門尉 長右衛門尉

長兵衛三郎

三十番 豊田彌四郎 秋元左衛門次郎

須賀左衛門太郎

卅一番 高山彌三郎 同彌四郎

矢口兵衛次郎

卅二番 茵田又次郎 木村次郎

同小次郎

卅三番 後藤三郎左衛門尉 同四郎左衛門尉

同兵衛太郎

卅四番 伊達八郎太郎 中村縫殿助太郎

伊達判官代

世五番 佐竹八郎

結城五郎

佐竹六郎次郎

世六番 大曾稱太郎兵衛尉

同次郎兵衛尉

武藤左衛門尉

世七番 長三郎左衛門尉

長太右衛門尉

長内左衛門尉

世八番 善右衛門次郎

彌善太右衛門尉

布施左衛門太郎

世九番 得江藏人

平賀三郎兵衛尉

得江三郎

四十番 笠間左衛門尉

出羽四郎左衛門尉

狩野五郎左衛門尉

四十一番 信濃民部大夫

同三郎左衛門

肥後四郎左衛門尉

四十二番 壹岐小三郎

足立木工助

壹岐三郎左衛門尉

四十三番 佐原太郎左衛門尉

下総十郎

伊賀次郎左衛門尉

四十四番 千葉八郎

相馬左衛門尉

大須賀左衛門次郎

四十五番 内藤七郎左衛門尉 押垂三郎左衛門尉

春日部左衛門尉

四十六番 近江四郎左衛門尉

豊前大炊助

加治八郎左衛門尉

四十七番 武田五郎次郎

仁科次郎三郎

小野澤左近大夫

四十八番 宇都宮新左衛門尉

氏家太郎

筑後左衛門次郎

四十九番 和泉新左衛門尉

同五郎左衛門尉

和泉左衛門次郎

五十番 佐原新左衛門尉

同四郎左衛門尉

同六郎兵衛尉

五十一番 大井太郎

南部次郎

同三郎

五十二番 宇佐義興一左衛門尉 彌次郎左衛門尉

關左衛門尉

五十三番 少輔左近大夫將監

同木立助

上総介太郎

五十四番 筑後圖書助

安積左衛門尉

伊藤三郎左衛門尉

五十五番 佐渡二郎左衛門尉 同三郎左衛門尉

同帶刀左衛門尉

五十六番 宇都宮四郎左衛門尉 同五郎左衛門尉

梶原右衛門尉

五十七番 加藤左衛門尉

河津八郎左衛門尉

河越掃部助

五十八番 小山五郎左衛門尉 宇都宮上條四郎

宮内左衛門尉

五十九番 伊豆守

武田四郎

小笠原六郎

六十番 藥師寺左衛門尉

淡路四郎左衛門尉

上野七郎左衛門尉

六十一番 陸奥五郎太郎

毛利藏人

那波次郎藏人

六十二番 若狹守

宇都宮修理亮

秋田城介

六十三番 遠江式部丞

越後太郎

遠江三郎

六十四番 相摸六郎

北條左近大夫將監

宮内少輔

次御甲著一人

次御胃持一人

次御小具足持一人

次御引馬一疋

次步走 被召人郎等三十人

次御乗替二人 童野箭候御與左右

次御輿 被上御儀 童在箭候御與左右

次著水干人々 各野箭

一番 駿河守 備前守 右馬權頭

二番 長沼淡路前司 大河戸民部大夫大和守

三番 天野和泉前司 玄番頭 佐原肥前々司

四番 肥後前司 江判官 伊賀判官

五番 出羽判官 壹岐大夫判官 因幡大夫判官

六番 左京權大夫 隨兵三斗人 其外打籠勢不可勝計

後陣

修理權大夫

隨兵二十人。其外折籠。水干侍。

廿二日

戊戌天晴

將軍家始御出。御直衣。

陰陽

頭維範朝臣。候御身固先太相國御亭次御。衆一條

殿。今日不及前駢沙汰。右馬權頭政村。被候御車前

云云

行列

先右馬權頭政村

次御車 入葉

宇田左衛門尉

四方由五郎左衛門尉 實經

小宮五郎左衛門尉

本間次郎左衛門尉 信忠

平左衛門三郎盛時

富所左衛門尉

若兒玉小次郎

小河三郎兵衛尉 真行

參河三郎左衛門尉

飯富源内長能

已上十人。著直垂帶。劍列步御車左右。

次衛府八人

各布衣帶。劍。馬。折。次。第。

一番 内藤七郎左衛門尉 盛經

安積六郎左衛門尉 祐長

二番 河津八郎左衛門尉 尚景

豐後四郎左衛門尉 忠經

三番 上野七郎左衛門尉 朝廣

駿河四郎左衛門尉 家村

四番 佐渡帶刀左衛門尉 基政

近江四郎左衛門尉 氏信

次寔從殿上人

左近中將親李朝臣



廿三日 巳亥 兩降 今日將軍家御案内自一條  
殿被差進前駢三人日中以後御出

行列

先前駢

右馬權頭政村

官内少輔泰氏

備前守朝直

次御車 八葉

小河三郎兵衛尉

本間次郎左衛門尉信忠

四方田五郎左衛門尉資經

飯富源内

治部權大輔兼康

左馬權頭盛長

皇后宮權大夫茂能

小宮左衛門次郎直家

平左衛門三郎

若兒玉小次郎

修理進三郎宗長

以上著直垂令帶劔候御車左右  
次衛府十人 各布衣帶劔

源左衛門尉

宇都宮四郎左衛門尉頼業

河津八郎左衛門尉尚景

肥前太郎左衛門尉胤家

佐渡帶刀左衛門尉基政

藥師寺左衛門尉朝村

三浦又太郎左衛門尉氏村

信濃三郎左衛門尉行經

宇佐美藤内左衛門尉祐泰

次殿上人

和泉次郎左衛門尉景氏

本近中將親季朝臣

入夜被行小除目將軍家任權中納言令兼右衛門督給

廿六日 壬寅 將軍家令補檢非違使別當給

廿八日 甲辰天霽 將軍家被奉御馬於公家

一御馬 大和前司祐時安積六郎左衛門尉祐長

二御馬 大和守景朝 河津八郎左衛門尉尚景

以上四人引之 各布衣帶劍

今日中納言等御拜賀也為御出立御覽大殿渡御六波羅殿於門外御下車是為希代事則被差進前

駢五人云

先一負

番長安利

府生為末

大志

少志家平

次前駢

左馬權頭盛長

刑部少輔家盛

治部權大輔兼康

皇后宮權大夫茂能

中務權少輔時長

次御車

丹治部右衛門尉

宮内少輔泰氏

備前守朝直

右馬權頭政村

駿河守有時

越後守時盛

小河兵衛尉

同左衛門次郎

平左衛門三郎

立河三郎兵衛尉基泰

池上藤七康親

以上十人著直垂帶劔候御車左右

先行

看督長四人

火長四人

雜色御後

次衛府二十人。下臈為先

大見左衛門尉實景 字佐義與一左衛門尉祐時

宮内左衛門尉公景 宗宮内五郎左衛門尉

本間次郎左衛門尉

四方田五郎左衛門尉

富所左近將監

飯富源内

淡路四郎左衛門尉時宗

伊藤三郎左衛門尉祐經

加藤左衛門尉行景

信濃三郎左衛門尉行經

近江四郎左衛門尉氏信

出羽三郎左衛門尉光家

肥前四郎左衛門尉光連

壹岐三郎左衛門尉時清

佐渡帶刀左衛門尉基政

小山五郎左衛門尉長村

三浦遠江次郎左衛門尉光盛

三浦駿河四郎左衛門尉家村

武藤左衛門尉景頼

上野七郎左衛門朝廣

關左衛門尉政泰

大曾孫兵衛尉長泰

次官人

主馬大夫判官家衡

次隨兵十人三騎一推並

一番 比條左近大夫將監經時 相摸六郎時定

足利五郎長氏

二番 三浦若狹守泰村 宇都宮下野守泰經

秋田城介義景

三番 武田六郎信長 小笠原六郎時長

千葉八郎胤時

家末 上野五郎重光

次扈從公卿二人 宰相中將實雄

三位中將公經

次殿上人五人

左中將實光

權中將親季

左少將為氏

以上乘車

二條少將孝定

近衛少將實藤

廿九日 乙巳天霽 太理廳始也檢非違使廿六

人皆參其中五位尉八人云大理出御各遂面拜云

及晚將軍家御參内供奉人同去廿二日至曉更渡

御于前右府并准后御亭云

卅日 丙午 卯一點將軍家還御六波羅

閏二月小

三日 巳酉天霽 依御招請將軍家渡御太相國

禪閣御亭御儲被盡美御贈物風流棚

各和漢書

入夜還禪六波羅

七日 癸丑天晴

戌刻佐女牛東洞院失火南北

二町餘火

十三日 己未霽

午刻日有重暈陰陽頭維範朝

臣帶繪圖家前馳奏六波羅殿殊申可有御慎之由

其後權天文博士季尚朝臣以下兩三人應召參上

被下維範朝臣所進圖可勘申所存之旨被仰之間

強非重變去建保年中道昌朝臣申於水無瀨殿白

知貫日之由奏聞之時孝重朝臣申敗之變者今暈

也云今夜維範朝臣奉仕天地災變御祭伊勢前司

定負奉行之二云

十四日

庚申

兩下終自

不休息

雖有重變

卅日

中降兩者可消歟之由

泰貞朝臣兼申之

十五日

辛酉天晴

戌刻維範朝臣

又奏六波羅

殿太白犯昇星

歲星犯坐星

由申之仍為將軍御祈

被行屬星祭

在衛朝臣奉仕之

戌四刻樋口町邊燒

亡

十六日

壬戌

未刻鞍馬寺燒亡失火

自小堂

火出來當寺者

桓武天皇御宇

延曆十五年丙子

藤

原伊勢人

依貴布禰明神之告

草創以降星霜既三

百八十餘年

專為帝都擁護精舍

三月六

七日

壬午天晴

將軍家令任權大納言給

又去

督別當給今日御不例御減之後御沐浴醫師時長朝臣被候云

十八日 癸巳 海老名左衛門大夫忠行被止位

記宜為本官左衛門尉之旨 宣下是不蒙關東御

免令直奏 叙爵之間依有其沙汰也

十九日 甲午 自去夜深更及辰尅雨降將軍家

渡御北山別業亭主并一條殿前右府以下自去夜

於此所被奉待有御與遊等半更還御六波羅云

廿二日 丁酉陰 晚雨降今日於六波羅殿屈南

北二京碩學被行仁王八講大殿准右為御聽聞入

御云 廿三日 戊戌 雨降未三點大風人屋皆破損庭

樹悉吹折申尅屬晴西風又烈御入講結願頗魔障也今日相摸國深澤里大佛堂事始也僧淨光令勸

進尊卑緇素企此營作云

廿八日 癸卯 今日春日行幸也

卅日 乙巳 小山下野守從五位下藤原朝臣朝

政法師生西卒十年八病患不經幾日數去比舍弟上

野入道日阿相共南都令登壇受戒云

四月小

二日 丁未 三浦若狹守泰村二階堂出羽守行

義等被召加評定衆之由被仰下各領狀云

六日 辛亥 天霽 將軍家 勅授事有 宣下云

七日 壬子 晴陰 將軍家有大納言御拜賀之儀

扈從公卿殿上人連軒前駢以下。同中納言御拜賀之時云。

九日 甲寅天晴。今日天台座主慧源僧正將御拜堂。

十日 乙卯天霽。一條殿御息若君福王公將入室于仁和寺御室給。大殿御同車君達右府良幕。

下實將軍家御扈從。後車雲客濟之焉。件若君日來將軍家室御猶子也。忽被變其儀。詔臣下御入室。

希代之例也。及晚還御。十一日 丙辰陰。及深更小兩降。今日將軍家御直衣始。

十六日 辛酉天霽。賀茂祭也。將軍家御見物之。

間每事花美。越例年則御家人廷尉能行家平基政。

光重賴業等渡大路。十八日 癸亥天霽。將軍家令辭權大納言給。

廿四日 己巳兩降。一條大殿兵仗御辭退被下。准三右宣旨。即又令辭之給云。

廿五日 庚午雨降。今日一條殿於法性寺殿被。遂御素懷御戒師飯室前大僧正浪快九條唄師皇。

崎法印成深御刺手法印印圓攝政殿以下濟之。群。參將軍家令參御。

五月小

四日 戊寅曉陰。及晚自將軍家被調進昌蒲御枕銀鏡并御扇等於公家云。件御枕者為六位定役。

調進者也而依被求御進物之次如此云

五日 己卯 戌刻太白犯軒轅大星希代變異也

見于延喜天曆二代御記云今日坊門大納言入道

殿可令謁申之由雖被示遣于左京地稱風氣辭退

云是承久兵亂之時彼禪門罪科事左京地殊依被

加潤色為故二品并右京兆等御計被省之間為報

其事今及此儀云京兆兼得其意不合向給云

十一日 乙酉 故左衛門尉坂上明定子息左兵

衛尉明胤領掌亡父遺跡事不可有相違之由合嚴

旨是石見國長由保播磨國巨智在地頭職河內國

藍御作手奉行近江國天福寺地頭等事云去年十

月四日父讓之死去明定依為若人左京兆頻憐愍

遺孤給云

十六日 庚寅 今日將軍家渡御右府御亭御桌

遊軍中若君福主所飼給之小鳥飛去自籠內在庭

前橘之梢若君周章給之間諸大夫侍等雖馳走無

所于欲取或雲客申云將軍家御共太略勇士也召

其中弓上手可令射取之給云仍若宮衆御前申此

由給此事將軍家殊有御思慮撰小冠召上之上野

十郎朝村此鳥不死之樣可射取之由被仰會朝村

不能諱由取弓與引目進寄于樹下波木枝葉尤茂

小鳥之姿僅雖見于葉之隙枝差違者非養由者輒

難獲之歟朝村蹲踞庭上取小刀削欠引目柱二

之後按之數支窺迴樹下諸人見其氣色敢不瞬遂



發箭鳥止聲箭落庭上朝村即持条件箭鳥所込于引自内也削捨目柱事此用意也被入籠中之處動尾羽轉鳴堂上堂下感嘆之聲滿耳將軍家令解御衣給亭主被召出御劍各為朝村纏頭云

十八日 壬辰 相摸國深澤里大佛御頭奉舉之

周八丈也

廿日 甲午陰晴 今日以將軍御家人左衛門少

尉藤原時朝藤原朝村等被加前右大

臣家普光御簡衆於朝村者依感射藝給及御所望

云

六月大

五日 戊申天霽 將軍家御衆春日社申剋雨降

及深更雷鳴降雹 御出行列

先駿河前司隨兵六騎

一番 長尾平内左衛門尉景茂

同三郎兵衛尉光景

二番 駿河四郎左衛門尉家村

三浦次郎有村

三番 駿河五郎左衛門尉資村

同八郎左衛門尉胤村

先陣駿河前司義村

次御所隨兵三十騎

一番 河内守光村

梶原右衛門尉景俊

千葉八郎胤時

二番 下河邊左衛門尉行光 關左衛門尉政泰

三浦又太郎左衛門尉氏村

三番 佐渡次郎左衛門尉基親 佐竹八郎助義

相馬次郎左衛門尉胤經

四番 氏家太郎公信 大曾彌兵衛尉長泰

壹岐三郎左衛門尉時清

五番 筑後圖書助時家伊東三郎左衛門尉祐經

宇佐義與一左衛門尉祐時

六番 遠江次郎左衛門尉光盛

和泉次郎左衛門尉景氏

加藤左衛門尉行景

七番 武田六郎信長 大井太郎光長

近江四郎左衛門尉氏信

八番 若狹守泰村 秋田城介義景

佐原肥前々司家連

九番 相摸六郎時定 足利五郎長氏

河越掃部助泰重

十番 北條左近大夫將監經時

陸奥掃部助實時

次御與 以下如御入洛時

江戸八郎太郎景益 山内藤内通景

品河小二郎實貞 池上藤兵衛尉康光

中澤十郎兵衛尉成經 本間次郎左衛門尉信忠

小河三郎兵衛尉直行 阿保次郎左衛門尉泰實

猪俣左衛門尉範政ハシロ四方ヨシカタ由ヨシ五郎左衛門尉資經イサネ  
本庄新左衛門尉朝次アサヒ修理進三郎宗長ムネナガ

平左衛門三郎盛時モリトキ立河三郎兵衛尉基泰モトヤス  
荏原三郎貞政サハラ

以上十五人直垂帶劔列步御與左右但各五人  
令結番每經行程二里五休息

次著水干人々

一番 相摸守重時サモリ武藏守朝直ムサシ  
右馬權頭政村ウマカミ官内少輔泰氏ウチノミヤ

二番 越後守時盛エチゴ甲斐守泰秀カミ下野守泰經シノ  
玄番頭基經ゲンバン壹岐大夫判官泰經イツキ

三番 豐前大炊助親秀トヨノリ宇都宮判官頼業ウツミヤ

四番 肥後前司為佐ヒノコ江大夫判官祐行エ

五番 出羽判官家平イデ伊賀左衛門大夫光重イガ  
大藏少輔景朝オホクラ

六番 後藤佐渡判官基政ゴトウ大和前司祐時ヤマト  
和泉前司政景イヅミ

後陣 左京權大夫修理權大夫サキ

已上兩所後騎數百人相列如雲霞此外人々從  
類或搆前路或追成群

六日 巳酉天霽日中雷雨今日將軍自春日社  
還御

七日 庚戌天霽遠江三郎時長主補藏人察内

之間。布衣侍五人。雜色一人。如不童一人。相具之。今日。即任右衛門權少尉云。

九日 壬子 紀伊國日前宮營作事付成功而可

造畢之旨依被宣下將軍家所令舉申給之任人等

于今不進其功之間有社司之訴仍無未濟可致沙

汰之由被仰下云。

十日 癸丑 加賀前司康俊依所勞危急辭申問

注所執事之間以子息民部大夫康持可為其替之

旨被仰下云

十四日 丁巳 前加賀守從五位上三善朝臣康

俊卒年七十二

十九日 壬戌 為洛中警衛出辻々可懸簾之由

被定仍被充催役於御家人等云

廿三日 丙寅 禪定殿下若君公禰主於仁和寺有

御剃髮之儀云。戊戌北邊燒亡

廿四日 丁卯 終夜雨降今日土御門大納言通

方薨年左京地令訪之給

廿五日 戊辰 雨降終日不休丑尅大風霹靂洪

水人屋多破損梅尾清瀧河邊地出云

廿六日 己巳天晴 今日攝政殿宇治入延引依

去夜雨洪水之故也

廿八日 辛未晴 晚頭雷雨今日伴大臣召仰延

引來月可被行之云

七月小

二日 乙亥天晴 午剋以後降雨今日任大臣召  
仰之

九日 壬午晴 今日攝政殿宇治入也扈從殿上  
數十人公卿一人御寮大納言

十日 癸未天霽 寅尅榮感與鎮星同變之由司  
夫之輩舉勘文

十一日 甲申 左京北密々象園城寺給是去年  
當于禪定二位家一十三年御息景為奉報彼恩德

於鎌倉所被終書功之一切經五千餘卷今日又迎  
件御月息依被奉納于唐院靈場也當寺者聖靈之

御歸依施主御渴仰異他所云每經卷之奧令加左  
京地署判給云

十六日 巳丑天晴 將軍家令蒙本座 宣旨給

十七日 庚寅小雨降 准后禪定殿下於法性寺  
殿令落飾給御戒師飯室僧正良快云

廿日 癸巳霽 今日任大臣節會左大臣實右太  
臣實內大臣實云

廿三日 丙申晴陰 戊剋小雨降今日外一尅將  
軍家御參石清水八幡宮午尅還御

廿五日 戊戌晴 法性寺禪定殿下御出家後始  
御象內前馳四人坊官四人緇素後車各一兩云

廿七日 庚子 六波羅御造營所役事無沙汰之  
國々相交之間有其沙汰早可令辨償之由今日被

仲下云

八月六

二日 甲辰

將軍家為令果年來御願給於春日社壇被供養一切經導師東北院僧正圓玄題名僧

百口云

十八日 庚申

十九日 辛酉

終日雨降八所御靈祭延引云雨休止然而時々又時雨灑山城

國惡黨新平大召禁之處逐電訖仍付在所可生勇

之由被相觸山城國等住人又可止雙六之由被仰

下云今日御靈祭也將軍家於今出河殿御見物間渡物風流結構異例云

廿五日 丁卯 將軍家令參賀茂紙菌北野吉由

等社給云

九月小

一日 癸酉雨

於左京地御亭被始行七箇夜大土公祭今夜泰貞朝臣奉仕之清基家氏晴茂國繼

親職等朝臣被結構蕃之云

九日 辛巳

寅刻太白犯大微右執法星月時熒惑犯軒轅戌尅月犯歲星又自亥刻迄丑時

流星或七八尺或三四尺不知其真色白赤今日為

齊藤兵衛入道淨圓奉行地頭間事有被經沙汰之

條之所謂云本司跡云新補率法不可混雜兩樣之

由下知之處不叙用於違犯者改易其就可被充行

勲功未給之輩次令補地頭之輩或肖先例或違父

御例之由訴訟之時不從御下知者召其所可充行  
官仕忠勞之輩并所知替次御祈勤仕人々跡事有  
如先條之子細者其所可充給他人云云  
十一日 癸未 山城國中庄園卿保惡黨等事殊  
可禁遏由有沙汰云云

十三日 乙酉 今夜明月得露左京地先年御在  
京有令對面給之人御懇志于今不等閑以月興為  
嫌被遣一首御歌

十八日 庚寅晴 子尅殿下北政所御流産七  
箇月云  
十九日 辛卯晴 右馬權頭政村為將軍家御使

被參殿下依令訪申去夜御事給也

廿日 壬辰 賀茂別當社領近江國安曇河御厨  
内藤江村事可止使入部之由被仰守護人近江入  
道虛假是依敬神之異他也

廿二日 甲午霽 初齋宮令入野宮御云  
廿四日 丙申晴 辨僧正定豪入滅去年補東寺  
長者不經幾旬月云是民部少輔源延俊男兼豪法  
印入室灌頂弟子也

廿七日 巳亥霽 御家人任官事所望之輩可令  
裁納成功之由相議之旨就有其聞今日被經沙汰  
可停止云凡成功之官職之外不可有御舉之趣被  
定云御在洛之次望申官位族多之又有御吹舉仍

御在洛之次望申官位族多之又有御吹舉仍

為固向後之法。及此評定。詮句勘者。相摸。三郎入道。真昭也。

十月大

三日 甲辰陰晴 入夜甚雨。今日鞍馬寺上棟。將軍家有御奉加馬三疋。御劔。砂金等也。河越掃部助。

為御使云

四日 乙巳雨下 松殿禪定殿下師家於天王寺

薨云。今日南都住侶武藏得業隆圓補東大寺別當

職。是去々年南京衆徒蜂起騷動時。竭忠節於關東

之間。可被行勸賞之旨。依有兼日約諾也。當寺前別

當頼曉得業者。隱置承父兵亂。張本秀康子息。刺掠

領山邊庄。其過已重疊。可被改易之由。被觸仰東大

寺別當僧正坊之處。件寺者為頼曉別相傳。非本所

成敗。依其身之咎。於沒收者。直可有御沙汰之旨。就

被報申。及此御計云

七日 戊申 松殿薨給事前武州令訪申遺跡給

小野澤左近大夫仲實為御使云

十一日 壬子 丹後國曾我部庄者。依為後白河

院法華堂領。不被補地頭。仍可停止守護使入部。夜

討以下事。出來之時者。庄家糾明犯否。可召渡其身

之由。今日被施行前武藏守。故右幕下。御遺命。殊被

重彼法華堂事之間。令申行給之云

十二日 癸丑 將軍家御參内。御直衣。右馬權頭

盛長。刑部少輔家盛等。供奉後車親。季朝臣也。其後



渡御一條令出河兩御亭明日可有御下向關東之  
故也於一條殿御贈物繁多也拾遺納言行成真筆  
古今和歌集雅忠朝臣相傳醫書等在其內云今日  
畿内西國中庄園卿保任人好以強竊博奕刃傷殺  
害為業葦事不嫌禪社佛寺權門勢家領不相觸召  
取其身且可注進在所之由被仰舍守護人等云  
十三日 甲寅天霽 寅一點將軍家關東御下向  
御進發也護持僧聖崎僧正成源醫師良基時長等  
朝臣也陰陽師泰真晴賢等朝臣又陰陽頭維範朝  
臣被召具之忠尚季尚在直等朝臣候御身固前後  
陣供奉人隨兵等同御久之時但各行糴花美軼前  
儀大相國禪閣於四宮河原御見物掘河大納言真

於大津浦被立車其外卿相雲客車不可勝計凡  
見物緇素以面為牆西尅著御小脇驛近江入道虛  
假立御所奉入御儲結搆無比類云  
十四日 乙卯晴 匠作前武州令衆侯御所給可  
然宿老多以著座小侍及坏數獻佐野木工助俊  
職等候陪膳虛假獻御引出物云已尅出御未以後  
兩降西斜箕浦御宿  
十五日 丙辰 未尅垂井御宿  
十六日 丁巳 申尅小隈御宿  
十七日 戊午霽 萱津  
十八日 己未霽 有熱田社御奉幣酉一點入御  
矢作宿邊左馬頭義氏朝臣亭

十九日 庚申 入夜雨下。戌一尅著御豐河驛。

廿日 辛酉風雨 辰尅出御於本野原甚雨暴風。

然而御輿前後人々者不及擁笠皆以舐鼻午刻以

後屬晴酉尅橋本御宿。

廿一日 壬戌霽 池田

廿二日 癸亥晴 懸河

廿三日 甲子晴 嶋田

廿四日 乙丑晴 蒲原 手越

廿五日 丙寅霽 御逗留蒲原宿聊依御不例也

廿六日 丁卯晴 未尅車返御宿

廿七日 戊辰霽 點澤竹下御宿

廿八日 己巳晴 酒勾驛濱部御所

廿九日 庚午 寅尅別而小雨己三點屬晴酉一

刻著御鎌倉御所

十一月大

十七日 戊子 入夜雪降於御所有和歌御會前

武州被叅真昭基經基政親行等為其衆甲斐守叅

秀經營有孟酒置物等云

廿八日 己亥 去十六日除自聞書到來將軍家

有御覽右大將公兼平云云即所被遣御賀扎也

廿九日 庚子天霽 今曉太白星祭以下被行御

祈等今日將軍家御叅鶴置八幡宮未刻御出

維範朝臣候及閉周防守光時役御劔今夕地震

十二月大

二日 癸卯 雪降

三日 甲辰 夜半以後雪下。及午刻天晴。今曉北

條左親衛為見鳥立被行向大庭野。三浦若狹守向

駿河四郎左衛門尉同五郎左衛門尉下河邊左衛

門尉遠江三郎左衛門尉武田六郎小笠原六郎以

下射宇等多以被相伴云

七日 戊申晴。今日評議之次。就諸堂供僧等事。

有被定之旨。是臨病患。附屬非器弟子。又立名代之

後落墮世間。猶貪其利。濶事向後。可停止之由云。

九日 庚戌天霽。午。越地震。今日京都使者參著

去月廿三日。改元。改嘉禎四年為曆仁元年。維範朝

臣撰進之。依熒惑變。及此儀云。

十二日 癸丑 大雪降。曙之後。北條左親衛。相具

若狹守以下。人々。逍遙山内邊。雉兔多獲之。

十四日 丁巳 終日雨降。今日評定御家人等。不

臨重病危急之期者。不可讓所帶於妻妾之由。被定

云。其後。匠作前武州被參御所。有恩澤沙汰。基經奉

行之。

十八日 己未 每月六齋。殺生禁斷事。被仰下。但

河海漁人。為渡世計者。非制止之由云。

十九日 庚申 於御所。節分御方違事。有其沙汰。

可被用。遠江守名越宿所之由。前武州。令申給之。麩

清右衛門大夫季氏。申云。彼所天一遊行方也。可有

憚云。被問陰陽頭維範朝臣。公家之外。不可有其憚

之由云仍治定名越亭云

廿三日 甲子霽。戊尅將軍家為御方違。入御遠

江守朝時名越亭是日來御本所也今日匠作注家

領惣負數配分給于子息等云大體内之被申合前

武州少々有用捨事云

廿四日 乙丑晴憚御逗留遠州亭今日依為歸已

日也是無其罪之由陰陽道雖勘申之法性寺殿令

忌御間被追御佳例云

廿五日 丙寅自名越還御遠州被進御引出物御

劍式部丞時章御馬遠江修理亮時幸同五郎時兼

等引之

廿八日 己巳 匠作前武州遠江守右馬權頭駿

河守宮内少輔等被桑右大將家二位家前右京地

等法華堂為歲末之故歟駿河前司毛利藏久大夫

入道甲斐守秋田城介桑會云

廿九日 庚午天霽。戊尅周防前司親實家燒亡

失火云

新刊吾妻鏡卷第三十二

新刊吾妻鏡卷第三十三

曆仁二年己亥

二月十日

為延應元年

正月小

一月 壬申天霽

堯飯

匠作御沙汰

如例御愈周

防右馬助光時

東帶御弓矢武藏守朝直

布衣御行

騰沓肥前守家連

一御馬

置鞍相摸式部大夫時直

二御馬

本間次郎左衛門尉信忠

相摸右近大夫將監時定

横地太郎兵衛長直

三御馬

佐原太郎左衛門尉家胤

同四郎左衛門尉光連

四御馬

佐原七郎左衛門尉政連

同六郎助連

五御馬

相摸七郎時弘 橘右馬允公高

二日

癸酉天霽

堀飯前武州御沙汰御劔右馬權頭政

村東帶

御調度若狹守泰村布衣御行騰秋由城介

義景評禮

一御馬

周防右馬助光時帶衣同修理亮時幸

二御馬

北條左近大夫將監經時帶衣

三御馬

堀原右衛門尉景俊

四御馬

陸奥掃部助實時原左衛門尉忠康

大曾禰太郎兵衛長經

同次郎兵衛尉盛經

五御馬

北條五郎兵衛尉時頼

彌次郎左衛門尉親盛

三日

甲戌天霽

堀飯遠江守御劔右馬權頭布衣

御調度

周防右馬助光時御行騰内藤七郎左衛門

尉盛經

一御馬

遠江式部大夫時章

小見左衛門尉親家

二御馬

南條八郎兵衛尉忠時 同平四郎

三御馬

陸奥掃部助實時

堀原右衛門尉景俊

四御馬

平新左衛門尉盛時

五御馬

遠江五郎時兼

飯田五郎家重

同四郎

堯飯以後將軍家御行始入御前武州御亭云

五日 丙子 御号始也

射手

一番 三浦 駿河五郎左衛門尉 佐貫左衛門次郎

二番 同 左原四郎左衛門尉 大河戶太郎兵衛尉

三番 南條八郎兵衛尉 平左衛門四郎

四番 藤澤四郎 本間源内左衛門尉

五番 橫溝六郎 原三郎

六番 小笠原三郎 神地四郎

十一日 壬午 雨雪降將軍家御祭鵜里八幡宮

午二點御出御車帶陸奥掃部助役御短佐渡判官

基政上野判官朝廣等供奉今日陸奥國郡鄉所當

事有沙汰是准布之例沙汰入百姓等私忘本進之  
備好錢貨所濟乃責追年不法之由依有其聞白河  
關以東者於下向葦所持者不及禁制又繪布麤惡  
甚無謂本樣可令辨濟之旨被定以匠作奉書被觸  
仰前武州

十七日 戊子 將軍家一所御精進始

十九日 庚寅 小雨降及終夜今日京都使者參

去年十二月廿八日宜秋門院崩御春秋六十七云

廿七日 戊戌 晴 入夜雨雪至半更屬霽今日已

尅自二所御歸著一昨日廿五日晚昏三嶋伊豆兩

社御奉幣云

二月大

三日 癸卯 於御所被始信讀大般若經權少僧  
都澄辨奉仕云

四日 甲辰 快霽 及夜半雨雪降雷電數聲

五日 乙巳 晴 酉刻雷雨甚

十四日 甲寅 武藏國小机郷鳥山等荒野野可開

發水田之由被仰大夫尉泰經今日打止管根山經

會是則別當興實與職與等依及喧嘩也云

十六日 丙辰 天晴 京都使者到著去七日改元

改曆仁二年為延應元年經範朝臣撰進之云

廿日 庚午 御家人所帶事知行歷年序之後猶

稱本領有訴申輩之間為斷如此監訴兼造式條之

上今更不及子細之由有御沙汰云

三月小

五日 乙亥 天霽 京都去月十一日已刻有日暈

變密奏之輩申狀不同之間兩度召勘文之上菅大

藏卿為長清大外記賴尚等及勘狀其狀等今日到

來於御前師食朝臣讀申之天文道忠尚良元季尚

等朝臣申重暈之由家氏申交暈之旨晴繼申白虹

貫日之由云大藏卿引後漢書文假郎顛之詞暈即

虹也大略白虹旨委細勘之大外記者暈虹先例本

文勘進許也

十一日 辛巳 内佐頭經長自京都參著云

十五日 乙酉 晴 司天輩依召皆參二月十一日

天變事被下京都勘文各可申存知旨之由被仰出



維範泰真晴賢等一同申重暈之由師負朝臣申云  
 晴經朝臣勘丈載白虹之旨尤甘心本文分明也云  
 十七日 丁亥晴 六波羅使者余著去二月廿二  
 日隱岐法皇於遠嶋崩御御年六十同廿六日奉葬云  
 廿九日 巳亥 匠作前武州著評定所給評定裝  
 等余進首根山別當興實與智藏三郎法橋良實遠  
 對決是當山二月经會之時興實搆殺敷於職衆座  
 御占土公奉成樂可令重煥給之由陰陽師七人下  
 同占申之云

五月

五日 甲戌 依御不働事被行御祈等

琰魔天供 甲斐守沙汰  
 藥師護摩 大藏卿法印 右馬權頭沙汰  
 泰山府君祭 維範朝臣 後藤佐渡前司沙汰  
 大土公祭 親職朝臣 陸奥掃部助沙汰  
 靈氣祭 廣相朝臣 兵庫頭定負沙汰  
 鬼氣祭 泰貞朝臣 信濃民部大夫入道沙汰  
 咒詛祭 晴賢朝臣 天野和泉前司沙汰  
 十一日 庚辰 今日將軍家有御浴之儀醫師良  
 基朝臣賜御馬御劔又御祈如意輪護摩安祥寺僧  
 正御湯加持天地災變祭陰陽頭維範朝臣  
 十二日 辛巳 將軍家仰太納言僧都隆辨於久  
 遠壽量院被令轉讀最勝王經云

十三日 法性寺禪閣御不例殊御增氣之由申之  
仍將軍家御周章之餘召陰陽頭維範朝臣以下七  
人被行御占各不可有別御事之由勘申維範朝臣  
御大事旨申之云前彈正大躬親實為奉行云  
十五日 甲申 前武州御病痲餘氣猶不散之間  
雖未及沐浴被載御判於御下知等狀事連日更不  
被懈緩云

廿三日 壬辰 雨降申尅赤木左衛門尉平忠光  
為六波羅飛脚衆著廿日未尅出京四箇日馳付殆  
如飛鳥即於前武州庭上下馬云  
廿四日 癸巳晴 兵庫頭定真為使節上洛依禪  
閣御不例事也前武州御使平左衛門尉盛時云

廿六日 乙未 前武州為禪定二位家御得脫被  
續作善事年々歲々未緩其中於彼法華堂之傍被  
建温室令結番薪等雜掌人每月六齋日可浴僧徒  
之由有沙汰仍誠後年退轉今日被定置文其狀云

南新法華堂六齋日湯薪代錢支配事  
右期以前頭人之許可令沙汰進之由面々所被  
仰下也隨到來請之天寺家令進納天可令取  
進返抄也若期月ノ十日ヲ過ニ不辨進及遲々事  
有之時ハ為頭人之沙汰天舉錢ヲ取天先寺家ニ  
令進納天後其懈怠人々ノ手ヨリ不諭日數之久近  
以一倍天可令徵取也其人若不致一倍之辨天猶  
以令難澁者頭人慥可令申事由也其時所領ヲ召

天。傍輩ノ懈怠ヲ可被誡者也。但頭人若私ノ恨ヲ重  
御公事ノ功ヲ輕クシテ彼懈怠ノ咎ヲ隱天。不訴天。寺  
家ノ訴訟ニ令及者懈怠ノ人ヲ閣頭人ノ所領シ可  
被召也。兼又此所課ニ限テハ如此被定置之後相互  
ニ分限ノ大小ヲ論ビテ令痛之輩アラハ是又可被行其  
科者也。一人若難溢ノ詞ヲ出サバ傍輩皆以可成習  
之故也。其初天發言ノ人ヲ重ク是ヲ可被誡也。何況  
即爲頭人之身不法ヲ致サン人ニ於テハ求可被棄置  
也。凡謂事之盤觴候于關東之諸人。不論貴賤上下  
成安堵之思天。各一郷一村ヲモ令領知事者偏是二  
品禪定靈之御恩德之所然也。有ラン輩誰不知恩之  
誠哉。而此最少ノ所課ニ於テハ或ハ忘却ノ由ヲ陳ビ或

過分之儀ヲ稱天。若ハ遲々セシメ若ハ令對捍天。聖靈  
ノ御爲ニ疎略ヲ致サン事是只可類于木石者也。於  
木石之類者恩顧ヲ施シテソレ何詮カアラン哉。然則至  
于不法之人々者所帶ヲアラタメラシム事更無所拘也  
各可令存知之由具ニ可被相觸也。者仰旨如此。誠  
可恐惶所詮此巨細ノ仰ヲ召承。聊モ懈怠ニ及者定  
テ被貶恨者也。早此御下知狀ヲ令書寫天。各座右ニ  
令並天。常可被備廢忘歟。有始無終者古人之所誡  
也。今日者雖驚之後年者漸々心ヲユルクセン者歟。必  
其終ヲ慎テ永可令適後勤給能々可有思慮事也。  
不可准普通之儀候仍執達如件

延應元年五月廿六日

左衛門尉盛經

六月小

三日 辛丑 今晚京都飛脚衆著評定殿下御不例於今者無殊御事。

六日 甲辰 武藏國請所等用途事為地頭沙汰。每年可有京進之所々。今日被定下之當時匠作所令國務給也。

前各守七箇條之式自可調一結衆之誠殊則奉始二品禪尼可導數輩先君兼又始自四祖二親欲助已息大族乃至自他法界平等利益抑此勤者起自如檀藤氏之中情雖始聊介至于龍華樹佛之下生不可退轉同存此趣可勤行之狀如件。延應元年七月十五日

正四位上行前武藏守平朝臣

廿日 丁亥及深更風靜月明將軍家俄渡御于佐渡前司基經宅被用御車御共人々折節此等計也所謂周防右馬助陸奥掃部助三浦河内守毛利藏人兵庫頭織部頭同駿河四郎左衛門尉同五郎左衛門尉結城上野判官等也於彼所召勝長壽院兒童等有管絃舞曲等興遊云。

廿五日 壬辰 越中國東條河上曾稱八代等保事為請所以京定米百斛可備進之旨地頭等去年十一月獻連署狀於禪定殿下仍可停止國使入部并勅院以下國役之由同十一月國司加廳宣就之去正月任國司廳宣地頭等寄進狀為東福寺領停

止 勅院事國役等為地頭請所可令備進年貢百  
石兼又當國宮嶋保雖當家領被紀返國領之由被遣  
禪定殿下政所御下文是為寄附彼寺所被相傳也  
仍被申其趣於將軍家之間可存其旨之由今日被  
奉御返事

廿六日 癸巳 今日評定犯科人事於輕罪之輩  
者被行赦之時雖被免至重科之族者不可然之由  
被定次強盜并重科之輩雖被禁獄申出其身可進  
關東之由可被仰六波羅者次依違地頭之各所召  
置之庄官百姓等事自今以後不可誠早可追出居  
住所云  
廿八日 乙未 去十一日以後連夜天變出現云

八月小

八日 乙巳 天霄 風靜午尅二棟御方將軍家御  
殿大納言定能卿御著帶也御加持聖崎僧正成  
中納言親能卿女御被大膳權大夫維範朝臣依為密儀於御所不被  
行云自去四月被行御祈等云  
十一日 丁未 被行天變御祈等北斗護摩大藏  
卿法印良信鎮星供助法印珍譽御祭維範朝臣云  
又依將軍家年來御素願於御持佛堂被供養百部  
金光明經導師三位法印賴兼題名僧十口僧相交  
布施取皆被用諸大夫所謂仲能親實佐房親光廣  
時等也  
御願文云

蓋聞金光明經者二萬歲治國之正論億千劫希世  
之真理也法應化之譬三德月明照開悟之門命也  
力之衆隨望花舊增益之道膽部州流布之發也機  
緣遍于我土最勝園森羅之文也其感被于群生是  
以憶實悟於月氏則金龍尊主傳三世讚歎之詞温  
芳續於日域亦朱鳥明主施百部轉讀之詔尔降君  
臣憑衛護之誓州間致齊持之功寔是諸經之王也  
豈非衆寶之寔哉伏惟弟子未識周南冢宰之家不  
圖入衆白兵權之府圯上三略法難聽庸材之性巧  
陽八陣之圖猶憶諸葛之塵所畜者廟勝之策也直  
德爲胃仁義爲劍所列者含生之群也虎夫在左雄  
率在右然間鎮幕共迫之後忽赴九陌之名區弱冠

三七歲之時始拜雙親之慈顏因茲幸過少吳氏之  
仁慧阜備大理卿之精要職兼金吾傳聲名於漢日  
之鳥位亞別相願獻納於虞年之龍九通三之左  
歲也於朝端不卑六軍惣一之上將也取民間可足  
矧亦子道云彰面觀太閤准右之遂素意皇澤是  
重頻憚獲闕勤主之奧微仍慣厲卿之訓強適踰涯  
之任何唯李次元之誇功勲也解印綬於文武之班  
祭征虜之守廉約之頌錄賞於士卒之賜而已哉遂  
乃去冬更雖歸榆柳之境向後猶期臨鳳凰之宮然  
開漁陽萬里之路鞞鼓昇而春書空鏢鴈雲孤式樓  
風塵收而秋月弥澄誠雖知銳氣之闢雅譽只是喜  
洪化之及巡方于時遂夏其安之時金商肅條之仲

月酌東漸之法水凝南謨之匪石奉書寫金光明經  
百部四百卷便屈紫衣經維之禪徒令讚歎金色光  
明之妙典於戲終露點而整裘經甘露城之梵發如  
舊禮月輪而致白言偃月營之道儀况新今之惠葉  
何不照視然則以此景福奉祝 朝庭吹萬之化同  
乾坤而無疆明一之輝共日月而遙照子有一善必  
獻二親皇上之外祖々々母也又伴彭祖之方人間  
之沙弥々々尼也共約恒沙之筭弟子將軍樹之花  
常鮮桃蹊契春神仙山之月高霽松 全壽繼嗣坂  
弘成莫釋角存之娛民庶悅豫納航琛輦之貢重依  
願念之甚深 有回向之 分三大良將得大法軍  
之名定奉如來之發勅二所禪儀答小善根之力速

並等妙之果位加之會節遺德難忍之故資三所幽  
靈之正覺芳合萊芳契難忘之故濟一室好仇之後  
途又冷故負外右京兆宜列彼界西左革座昔楚國  
公者周室之大將軍也寫佛書以施一切之舍識今  
魯愚者 皇朝之大將軍也展法筵以祈二世之所  
求恭敬之趣精誠相同者歟凡厥有緣無緣之庶類  
併證三藐三菩提勝因敬白

延應元年八月日弟予征夷大將軍正三位藤  
原朝臣敬白

十五日 壬子天晴 鶴野放生會將軍家依御憚  
無御出匠作 爲御使令奉齋給賢息武藏守朝  
直式部大夫時直右近大夫將監時定被扈從又伴

渡前司基經前大藏少輔景朝伊豆守頼定出羽前  
司行義等舞樂之間候下宮廻廊云

十六日 癸丑晴

將軍家為覽流鏑馬出御馬場

御棧敷左近大夫將監經時左馬助光時候御輿寄

織部正光重役御劔前武州追令參給大夫判官泰

經出羽判官家平不供奉御出依別仰警

固馬場陸奥掃部助實時候御棧敷前座床子

廿二日 己未霽 二棟御方始渡御大倉御座所

九月大

十一日 丁丑 諸國地頭等以山僧并商人借上

輩補代官事一切被停止是為貪當時之利濶不顧

後日之煩以如此輩補代官之間偏忘公物備只廻

私用討之由依有其聞也

十六日 壬午 京都道々之輩號武士作平好付

沙汰之由被聞食及間可停止之旨被仰六波羅云

廿一日 丁亥 尾張國住人中嶋左衛門尉宣長

者承久逆亂之時為官軍之由有沙汰被収公所領

然而當時候御所中頻依愁申之於尾藤田島者可

付渡之旨今日被仰付西郡中務丞云

卅日 丙申霽 今日評議御家人妻改嫁事致所

領之成敗行家中之雜事於令現形者可有其戒之

由被定入夜於御所有和歌御會題行路紅葉曉擣

衣九月盡右馬權頭北條左親衛相摸三郎入道伊

賀式部大夫入道兵庫頭佐渡判官等獻懷紙



十月小

八日 甲辰天晴 卯刻前武州二所御進發去四

日御精進始也。左親衛同以被衆詰云。

九日 乙巳 風雨甚及晚雷電。

十日 丙午 天變御祈内外典數座被行之云。

十一日 丁未晴 左兵衛尉藤原長定。法名澤園。

歸黃泉。年四十一三

十二日 戊申天晴 亥尅前武州自二品令著給。

十三日 己酉 兵庫頭家貞堂供養導師。亞崎僧正

成源

十七日 癸丑 爲二棟御方御産平安御祈被行

七座咒咀祭維範親職資宣晴貞晴平廣資範定等

奉仕之

廿日 丙辰晴 午刻陰陽師廣經衆御所今日已

刻日兩珙之由申之作進繪圖兵庫頭爲申次持衆

御前云

廿一日 丁巳霽 昨日廣經注進變異事被問司

天輩維範朝臣申云暈虹若日月蝕之時於令出現

者以其次可勘申也以珙斗及參問事於京都未覺

悟之云

廿八日 甲子 二棟御方御産御祈屬皇祭維範

朝臣奉仕之

十一月大

一日 丙寅 寅尅西方雷電數度午尅以後震動

大風甚雨。近日信濃國司初任檢註事。有其沙汰而  
 諏訪五月會。再御射山頭人等。企訴訟相當神事頭  
 番之輩。有預免許之先例。但被優神事。雖被免其年  
 以後年。於被遂行其節者。不可有免除之由。仍今  
 日有評定。被尋問先例於當社大祝。信濃權守信重  
 二日 丁卯 北條五郎兵衛尉有嫁娶之儀。毛利  
 藏入大夫入道西阿息女也。今夜被渡宿所。  
 五日 庚午 薩摩與一公負與伊直前司頼定相  
 論出羽國秋田郡湯河湊事。今日於御前遂一決散  
 位康連奉行之。被付公負云。頼定為妻女人父遺領  
 之由申之云。

六日 辛巳 二棟御產平安御祈。被修靈所祭。維  
 範朝臣為管領。

九日 甲戌 信濃國司初任檢註事。諏方大祝。信  
 重捧請文。當社五月會御山以下。頭役人等申國檢  
 事。依相當頭番不限其被免。一任間事為先例之由  
 載之。仍重御沙汰之趣不及異儀。

十二日 丁丑 午。尅大地震。

廿日 乙酉 己卯 二棟御方。有御產氣。自大  
 倉移于施藥院使良基朝臣藥師堂之宅。給可為御  
 產所云。御驗者助僧正嚴海以下。皆以衆集彼所。鳴  
 絃役人衆進為兵庫頭。定負奉行御祈等事。有其沙  
 汰云。

廿一日 丙戌天霽。辰刻御平產也。若君先御驗者三人。民部卿僧都宰相僧都大夫僧都賜祿被引御馬。置鞍。次醫道女醫博士賴行給祿。三重衣。於庭給之。被引御馬。置鞍。下立庭上。取之。次陰陽道大膳權大夫維範朝臣給祿。二衣重薄衣。御馬。置鞍。賜之。作法如前。次資宣廣資。御彼衆。各二衣一領御馬。裸拜頌之。佐渡前司基經為奉行。雜事勘文。維範朝臣一人獻之。載已刻誕生之由。助法印珍譽申云。辰終。尅也。有時刻相違者。宿懼方勘文。可相違云。仍書改之。載辰字云。

十二月大

五日 庚子

未尅前駿河守正五位下平朝臣義

村卒頓死。大中風云。入夜前武州向故駿河前司弟令訪彼賢息等。給人々群集。左馬助光時為將軍家御使云。

十三日 戊申

若君御前御行始之間事。被經御

沙汰。被問吉方東若坤方吉之由。維範朝臣申之。東方雖為吉方。乘廿一日者太白方也。坤方依為吉方。自產所施藥院使良基朝臣大倉家當件方可然之。人家可見定之由。被仰下。仍為平左衛門尉盛經奉行。令維範朝臣相計之。加賀民部大夫康持并武由入道等。各越家叶方角之由。申之。盛經令披露此旨。康持頗尋當也。早可被用武由者。道世者不可然之由。被仰出云。

廿七日 壬戌天晴 未刻前武州南御邊隣有矢  
火入屋五六宇災

廿九日 甲子 丑刻武藏大路下佐々木隱岐入  
道家以下數十字燒失之火云

延應二年庚子七月十六日爲仁治元年

正月大

一日 丙寅天晴 境飯匠作御右馬權頭

御弓夫武藏守朝直 御行騰沓佐渡前司基經

一御馬相摸式部大夫時直

佐原六郎兵衛尉時連

二御馬 相摸七郎時弘

本間源内左衛門尉忠直

三御馬 佐原太郎左衛門尉胤家

同四郎左衛門尉光連

四御馬 吉良大舍人助政衡

原四郎左衛門尉泰經

五御馬 相摸右近大夫將監時定

山城前司元忠

今日覽吉書境飯以後將軍家御行始入御前武州  
御亭修理亮時幸持御劍右馬權頭政村以下數輩  
供奉

二日 丁卯天晴 境飯前武州御沙汰 御劍駿河

守有村

御弓矢甲斐守泰秀 御行騰秋田城介義景

一御馬 置 北條左近大夫將監經時

信濃三郎左衛門尉行經

二御馬 北條五郎兵衛尉時頼

近江四郎左衛門尉氏信

三御馬 陸奥掃部助實時

伊東六郎左衛門尉祐盛

四御馬 平新左衛門尉盛時 同四郎

南條八郎兵衛尉忠時

五御馬 陸奥七郎時尚 前武州御亭云戊尅

及晚若君御前御行始御前 星出現申方芒氣三尺指辰巳方色白赤前陰陽

助親職朝臣最前參申御所定負申次云但此去年

十一月晦夜出現人々見之云

三日 戊辰天晴 八夜陰今日境飯越州御御劍

備前守時長

御調度伊豆守頼定 御行騰出羽前司行義

一御馬 遠江五郎時兼 小井互左衛門尉

二御馬 笠間左衛門尉時朝

宇都宮五郎左衛門尉宗朝

三御馬 信濃三郎左衛門尉行經

同四郎左衛門尉行忠

四御馬 陸奥七郎時尚 大和判官代次郎宗經

五御馬 相摸左近將監 同七郎

四日 巳巳晴 戊尅申方彗星出現芒氣四尺指

巽方色白赤々色少本大如鎮星云

五日 庚午 入夜雨降前武州御亭匠作遠州甲斐守以下客人被系依天變事御酒宴不及數獻故有御引出物等云。

六日 辛未天晴 入夜陰彗星不現今日御弓始也。

射手

一番 佐々木八郎左衛門尉 橘次右衛門尉

二番 神地四郎 小諸左衛門尉

三番 本間源内左衛門尉 廣河五郎

四番 下河邊左衛門次郎 秋庭小次郎

五番 橫溝六郎 藤澤四郎

七自 壬申天晴 戌刻彗星現歲星傍相去二尺餘計亡

氣指良方光芒五尺軸星大如大白

八日 癸酉 戌赴彗星迎歲星相去二尺計今日被始

行天變御祈護摩

藥師 承快法印 熾盛光 宰相僧正

尊皇王 道禪法印 八字文殊 良信法印

九日 甲戌 彗星透雲間芒氣不明

十日 乙亥 兩降辰剋雷鳴今夜彗星不現

十一日 丙子 戌赴彗星犯辟一星相去一尺計同時

月入東井星

十三日 戊寅 辰地地震

十四日 巳卯 於御所被行天地災變祭維範朝

臣奉仕之將軍家出御祭庭周防前司親實為御使

十五日 庚辰 評定始也先之正月以後雖行之

依彗星事及此義云

前武内被祭 評定衆

右馬權頭 武藏守 攝津前司

佐渡前司 出羽前司 秋田城介

大宰少貳 對馬前司 加賀民部大夫

太田民部大夫 清右衛門大夫 佐藤民部大夫

十七日 壬午 於鶴望宮寺令百口僧被行仁主

百講將軍家有御祭是依彗星出現事也此外御祈

等 菅根本地護摩法親伊豆山本地護摩法賢長

七壇北斗供

中壇 安祥寺僧正

脇壇 定雅僧都 成慧僧都 定清僧都

征審僧都 隆辨僧都 守海僧都

愛染王法 内大臣法印

天胄地府祭 權曆博士定昌朝臣 兵衛藏人親

季為御使

十八日 癸未 彗星近奎自去夜於御所被行屬

星祭晴賢朝臣奉仕之今夜將軍家出御祭庭右馬

權頭政村為御使

十九日 甲申 彗星入奎中今夕重被行變異御

祈七曜供珍譽法印子刻於御所被行三萬六千神

祭前大藏大夫泰貞朝臣奉仕之左馬頭義民朝臣

沙汰也。御使内藏權頭資親將軍家出御祭庭云。又  
有七座泰山府君祭。廣經資俊晴茂國繼晴秀資宣  
晴尚等奉任内藏權頭資親安藝守親光兵衛藏人  
親家以上三人勤御使將軍家出御如法泰山府君  
祭親職朝臣行于里亭安藝守親光為御使也。賜祭  
祈之上。被遣御馬置鞍御劔九柄御雙子筥等云。

廿日 乙酉 為御祈等重被修護摩。

一 神宮御子職掌等依為祠宮所充給之地無指罪  
科下帶其職不可默定事

一同社司給地無上仰之外別當以私芳心不可立  
替遠所狹少地事

一 依為社司令拜領地輩之中無子息之族或讓

家女子或付養君權門致沙汰之間新補官人無  
給地之條不使事也自今以後子息不相傳之者  
付職可充行其地事  
以前條々社家存此旨不可違失之狀依仰下知  
如件

延應二年二月廿五日 前武藏守

廿九日 甲子 將軍家被遣御馬二疋鹿毛於大  
宮大納言相是來月為公卿勅使可被參太神宮  
之故也

三月大

六日 庚午天晴 京都使者參去二月廿二日法  
性寺禪定殿下姬君將軍家妹為尚侍御各子之由云



七日 辛未天晴 未尅將軍家若君御五十日百日也。於寢殿南面有其儀前武州布衣著西侍北座給御家人數輩叅候時刻自政所進餅以下御前物昇居于西侍北縁信濃民部大夫行奉布衣為奉行北條大夫將監經時布衣被候陪膳前集人正光重布衣前山城守元忠布衣入同待北遣戶經前根妻戶持叅簾外親衛取之被置御前其後被進御劍砂金等役人。

將軍家御方

御劍 遠江守朝時

砂金 右馬權頭政村

若君御方

御劍 右馬助光時

砂金 民部大夫時章

御馬一疋 置鞍 上野弥四郎右衛門尉時光

同五郎兵衛尉重光

次於待所有益酌等凡今日事悉以前武州御沙汰也盛經景氏等奉行之

九日 癸酉天晴 政所造昇之間今日有吉書始

儀前武州布衣之叅給評定衆前攝津守師負藏人

大夫入道西阿以下叅上又於御所有尊勝陀羅尼書寫供養導師聖崎僧正成源

十二日 丙子 當番無故不事輩五人被止出仕

所謂宇都宮五郎左衛門尉廣澤三郎兵衛尉塩谷

四郎兵衛尉結城上野十郎海老名左衛門尉等也

陸奥掃部助奉行之

十七日 辛巳 京都使者參著去七日。尚侍御入内。語。

十八日 壬午 關東御家人并錄倉祗候人之萬

事停止過差。可好儉約。條々事。日來有沙汰。今日被

造其制符。自來四月一日。固可禁制之。云。又御家人

即等任官事。向後所被停止也。依之關東家人之由

稱申者。糾明主人及相觸重時。可被申任之。趣兼日

可被示置官藏人方以下公事奉行。之旨。被仰遣六

波羅。

四月小

一日 乙未 新制條々事。今日以後。固可守御旨

之由。被仰下。若猶不叙用者。隨見及。且任法。可被行

罪科云。今日京都使參。去月十五日。大相國良平薨

給。五十一。六。之由。申之。將軍家御伯父也。

八日 壬寅 子。尅前武州御亭。御廐待。鸚鵡。

九日 癸卯 天霽。依鸚鵡恠異。於前武州。公文所。被

行百怪祭。

十日 甲辰 天晴。若君御方。被定御祈。聚。異。晴。僧

正。成。涼。助。僧。正。嚴。海。助。法。印。珍。譽。陰。陽。師。一。番。泰。負。

二。番。晴。賢。三。番。國。繼。等。也。兵。庫。頭。定。負。為。奉。行。令。番

之。

十二日 丙午 故匠作遺領事。未分死去之間。任

去々年十二月廿三日。惣自錄。被支配。子息等。又若

稜前司。秦村河內前司。光村左衛門尉。家村。資村。層

村童村等賜亡父義村遺跡安堵御下文有進物等

兄弟各被列參御所并前武州御方云

十四日 戊申天晴 子尅月蝕昔虧正現

十八日 壬子 未尅地震

北五日 己未天晴 被評定之退座分限所謂祖

父母養父母養子孫相舅伯叔父甥從父兄弟小舅

夫妻烏憎子子聳等

北七日 辛酉 為將軍家御折被行七座泰山府

君祭泰貞晴賢國繼晴貞廣資以平文方等奉任是

兵庫頭定貞依有夢想之告申行之云

七日 戊戌 甚雨暴風自三所御下向之間路次

頓也隨兵以下供奉人皆不及取笠濕衣裳云

十日 辛丑 去三月依不事被止出仕之輩蒙免

許陸奧掃部助彦仰加下知云

十四日 乙巳天晴 入夜北條武衛除服

十五日 丙午天晴 鶴聖放生會將軍家御參宮

於廊車寄戸曆博士定昌朝臣衣冠及閉相摸右

親衛役御劔佐原七郎左衛門尉政連懸御調度

十六日 丁未天晴 今日又御參宮近江木夫判

官泰經彰帶出羽判官家平等供奉

廿二日 癸丑 鶴聖神護寺去二月顛倒之間日

來被修造已造畢之仍今日奉入本佛云

九月大

七日 丁卯 御所御持佛堂彼岸法華懺法結願

也。僧衆分賜五十二種物。此外有御布施。其後佛師參河法橋。依召參御持佛堂。奉造始北斗七星。八宿七曜十二宮等形像。雖為九月造立佛像。無憚之由。及御沙汰。云。兵庫頭定負奉行之。

八日 戊辰 戊剋施藥院使正四位上丹波朝臣良基卒。年五十五。于時在伊豆國北條小那溫泉。云。

十六日 丙子 月蝕正現。皆虧初未尅。後未戊尅。ハハ分。

卅日 庚寅 御家人等中任官之輩。不勤行役事。依有其恐。召進用途之由。今日有評定。所謂左右衛門尉分。人別一百匹。左右兵衛尉分。人別七十匹。左右

近將監分。人別三十匹。内舍人分。人別九匹。等也。不

供奉行幸等者。為每年役。可進濟云。且加催促。令致沙汰。可注進交名之旨。所被仰諸國守護人也。

十月小

十日 庚子 於前武州御亭。可被造山内道路之由。有其沙汰。安東藤内左衛門尉奉行。

十三日 癸卯 天晴。前武州并評定衆等。被參御所。五大堂内。可被建北斗堂之由。有議定云。

十九日 己酉 天晴。大倉北斗堂地。始喜佐渡前司兵庫頭等。可奉行之云。為前武州御沙汰。被造山内。道是嶮難之間。依有往還煩也。

閏十月

五日 甲子 問狀事。問答訴人等。掠申之旨。露顯

之時者可處罪科之由。面々可被仰舍之云。太宰少  
貳為佐。加賀民部大夫康持為奉行云。  
廿八日 丁亥 於御所。北斗堂事始以下。日次等  
事被定之。

十一月大

十二日 辛丑

大倉北斗堂地被引始之前。武州

監臨給

廿一日 庚戌

今日為鎌倉中警固。辻々可燒。籬

之由被定。省充保内在家等。定結番可勤仕之旨。被

觸仰保之奉行。人等云。以此趣可被仰遣。六波羅云。

廿日 己未 天晴 鎌倉與六浦津之中間。始可被

當道路之由。有議定。今日曳繩。打丈尺。被配分御家

人等明春三月以後可造之由。被仰付。

十二月大

十二日 辛未

洛中辻々籬松用途事。被定侍所

處對捍之由。依有其聞。隨多少。可令充造籬屋。只可

註申交名之由。今日被仰六波羅云。

十五日 甲戌

左衛門尉藤原基行法師。行阿死。

年四

十六日 乙亥

為二所御精進屋。御所巽角被立

新御所一字。檜皮膏也。別被立門云。今日於御所有

評定二所三鳴井。春日等社。每日可有御神樂之由。

將軍家有御立願。是已可為莫大用途。每月被沙汰

之條。御家人煩也。募其分。可被寄附一所。歟之由。被

經沙汰之處折節無便宜之地被定功錢且止每日之儀可為每月云次御家人任官功錢事有其沙汰隨納或百貫或五十貫令進上官庫可取進返抄之由可被仰六波羅云

此外就地頭所務以下事被定條々

一本補跡所々檢斷事

可任先例者

一厨雜事等事

不謂本新補一向停止馬草薪以際者

一人倫賣買事

勾引中等者可被召下關東被賣之類者隨見及可被放其身只可觸路次關々也

一諸社神官并神人等令書起請時於他社不可書

由事

於京都令書者不嫌自他社於北野可書也

一可被行罪科由被載御下知了見事

可書載子細於分明者

廿一日 庚辰 今朝前武州相具評定衆等令衆

右大將家法華堂被修佛事莊嚴房僧都行勇為導

師是依為故隱岐次即左衛門入道行阿初七日忌

景也凡向後於評定以下携公事輩之没後者必可

勵追善之由及衆談云

廿三日 壬午 春日社并二所三嶋每月御神樂

事明春正月十七日可被始行之由今日為兵庫頭

定カク身カク奉カク行カク被カク仰カク下カク

新刊吾妻鏡卷第三十三

二十六

